

『就実大学大学院教育学研究科紀要 2018（第3号）』 抜刷

就実大学大学院教育学研究科 2018年3月10日 発行

# 青年期において身体症状が慢性化する要因の検討

—言語で表出する力に着目して—

**Consideration about causes of chronic physical symptoms in adolescence**  
**— Focusing on the ability to express in language —**

棧 敷 瑞 穂

# 青年期において身体症状が慢性化する要因の検討

## —言語で表出する力に着目して—

教育臨床心理学コース 3616002 棧敷瑞穂

### I. 問題と目的

青年期は、様々なストレス要因から不登校等の学校不適応が引き起こされることがある。文部科学省（2017）の調査によれば、平成28年度の不登校児童生徒数は増加傾向を示しており、約134,000人と平成27年度より1.3%増加している。学年別では、中学生は小学生と比べると約3倍の割合で出現している。日本学校保健会が行った平成23年の調査では、健康相談の中で「身体症状」についての相談が小学校で31.5%、中学校で24.6%、高等学校で34.6%という結果になった。青年期の「身体症状」の訴えの背後にはストレス反応と判断できる例も多く、身体化に長期的にとらわれることは、学校生活にも悪影響を及ぼすことが推測される。

本研究では、まず、身体症状にとらわれる要因を文献的に探索し、その要因の中で気持ちを言語で表出する要因に焦点を当てて検討することにした。

### II. 研究1

1. **目的**：研究1では、我が国の心理臨床分野における身体症状を扱った青年期の事例報告や調査研究から、その背景要因について概観し、検討することを目的とした。
2. **方法**：2016年4月～10月にかけて、CiniiとMAGAZINEPLUS、図書館を利用して文献・書籍検索を行った。海外文献では、Academic Search Premierを利用し文献検索を行った。「身体表現性障害」「身体症状症」「心身症」「身体化」「somatic symptom disorders」「somatoform disorders」をキーワードとした。
3. **結果**：文献を整理した結果、身体症状に長期的にとらわれる背景要因として、過剰な適応やストレス耐性の低さ、自己を否定的に捉えている①認知要因、自身や状況に合わない対処方略の行う②対処要因、自身の取り巻く生活環境や友人関係、幼少期からの心と体の未分化の継続である③環境要因、言語化することに対する葛藤や不安、発達障害の特性である④発達の要因、日常的に感じる不安や抑うつ状態である⑤心的要因に大きく分類することができた。これら諸要因の内、発達の要因の1つである言語化（言語で表出）に着目する。

### III. 研究2

1. **目的**：気持ちや考えを言語で表出する力が弱いほど、身体症状に訴える傾向にあるとの仮説を設定し、これを検証していくことを目的とする。
2. **方法**：2017年7月にA県内の大学生を対象に質問紙調査を実施した。大学生の計322名のうち、297名（男性44名、女性253名）を分析対象とした。質問紙は①フェイスシー

ト, ②Patient Health Questionnaire-15日本語版 (村松, 2014), ③自己表明尺度 (南山・中村, 2015), ④アサーションの心理的要因尺度 (柴橋, 2004) の3つの尺度で構成されている。

3. **結果**：各変数間の相関係数を算出したが、尺度間には有意な各変数間に相関はみられなかった。次にアサーションの心理的要因の因子ごとに分け、相関係数を算出した。その結果、PHQ-15とアサーションの心理的要因の「スキル不安」との間には弱い正の相関がみられた ( $r=.38, p<.01$ )。また、自己表明と素直さへの肯定感との間には中程度の相関がみられた ( $r=.55, p<.01$ )。一方で、自己表明とスキル不安の間には中程度の負の相関がみられた ( $r=-.41, p<.01$ )。

#### IV. 総合考察

慢性化・持続化する身体症状の背景要因を検討した結果、従来から示されている気質や認知要因だけでなく、新たに言語化の困難といった背景要因を見出すことができた。研究2では、気持ちを言語で表出する力が弱いほど、身体症状に訴える傾向になると仮説を設定し、相関分析を行った。その結果、PHQ-15と自己表明との間に相関は示されなかった。しかし、自己表明と関連する下位尺度との間には弱い相関がみられたことから、仮説は部分的に支持された。言語で上手く伝えることに不安が強いと、気持ちを言葉で表出する力を弱め、代わりに身体症状で表出しがちになると解釈できるかもしれない。